

心理学からみた歩き遍路体験，その人間形成的意義

—— 学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析から ——

皆川直凡*

(キーワード：歩き遍路，人間形成，俳句の創作と鑑賞，自己表現力，省察力)

序論

人間は，さまざまに変動する状況の中で自ら気づく感性と，自ら選択し判断し決定し行動する知性，そして人間関係を築く力を必要とする。人間関係を築く力の育成には，会話力の向上など外的対人関係能力と自己や他者のよさを認める気持ちをもつなどの内的対人関係能力の両面からのアプローチが必要であり，その主要な方法として協同的学習があげられる(皆川・正岡，2008)。学校では主として同年齢集団による協同的学習が行われているが，ものの見方や感じ方，さらには価値観の多様な異年齢間の交流を付加することにより，協同的学習の長所が最大限に活かされると考えられる。本教育プログラムでは，日本語の美しさや季節感を感じさせ児童の健全な成長に良い影響を及ぼすメディアである俳句に注目する。俳句の創作と鑑賞をとおして周囲の状況に気づき，自己を見つめ他者と関わり合うことで，理解力，表現力といった知性と感性の育成，ならびに，よりよい人間関係を築く力の育成が促進されると考えられる(皆川，2005)。知的・論理的なものがあまりに先行して子どもの感性・感情の面がおざりにされかけている時代に俳句の効用が意識され地域・学校で俳句の学習が行われているのも事実であり，俳句をとおした活動で子どもが自己表現により認め・認められる楽しさを経験する例も報告されるようになった(俳人協会，2001)。本研究は，このような枠組に基づき，感性と知性の科学である認知心理学の知見ならびに方法論を教育に応用するという視点から，「四国の文化アイデンティティである遍路の心を日本発信の短詩型である俳句によって表現する」という到達目標を掲げて，本学の大学院ならびに学部の授業において3年間にわたって実践してきた教育プログラムの成果を検証し，教育界に提言することを目的としている。

方法

事前授業と歩き遍路体験から成る学部授業科目「阿波学」において，心理学の立場から遍路を考究する事前授業(全5回のうちの1回)と歩き遍路体験の引率を担当し，歩き遍路体験において学生に俳句の創作を指導した。この「阿波学」は2008年度と2009年度に開講された。また，2007年度には，大学院授業科目「四国遍路と地域文化」において，同趣旨の教育実践を行った。本研究では，後者の成果についても合わせて検討する。学部授業科目「阿波学」は，前期開講科目であるが，後期には「地域社会研究」が開講され，歩き遍路による体験で得られたことを省察して研究報告を行うことを内容とする教育が行われ，歩き遍路体験者の過半数が受講した。歩き遍路体験に対する省察への関心の高さをうかがい知ることができる。

学部授業科目「阿波学」における本執筆者担当の事前授業の概要

遍路体験の心理学的意義

社会的存在である人間のこころ(知・情・意)の科学的理解を目指す心理学の観点から，歩き遍路体験は，途上の自然や文化，そして人間(同行者，地域住民)との交流から，自己を見つめ直す好機と考えられる。先行研究では主として，感情や意欲の変化が検討されてきたが，ここでは，認知の変化にも着目する。

*鳴門教育大学人間形成コース

体験を深める手段としての俳句

体験の意義は、心に刻み込んだり思い返したりすることにより、いっそう深まる。日本人は、自然、文化、そして人間との交流を心に刻み込む手段として、俳句という短詩型を創造し、世界に向けて発信してきた。遍路の途上でも、数々の俳句が詠まれてきた。そこで、この授業では、歩き遍路の途上で出会う風物や、同行者や地域の人々とのふれあいをテーマとして俳句を作ることを提案する。俳句の面白さ、豊かさは、有季定型によって生み出される。その仕組み（十七音のリズム、季語）について、まず説明する。

俳句創作のすすめ、俳句創作入門

自らが体験する出会いを季語と結び合わせることによって俳句が生まれる。若い人はフレッシュな感性で率直に詠むことができ、人生経験を積んだ人には深い味わいがにじみ出てくるというように、それぞれの良さが自然に現れる。誰が詠むにしても、その根本に季語がある。遍路の途上では、さまざまな風物に出会う。句の食材にも出会う。その一つ一つが季語なのである。歩き遍路は俳句をつくる絶好の機会であるといえる。この機会に、自分自身の心のかたちを、俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみよう。

俳句創作入門 ※ただし、必ずしもこの方法によらなくてもよい。
 原則①俳句は十七音で、季語が一つ入っていればよい
 ②俳句の基本リズムは、五／七・五または五・七／五
 手順①俳句に詠みたい季語を見つける。
 ②季語と直接関係はないが、イメージの近い十二文字の文を作る。

十二文字（五文字＋七文字）の文＋「季語（＋かな）」

「季語（＋や）」＋十二文字（七文字＋五文字）の文

歩き遍路中の実践

歩き遍路の実施時期は、9月下旬、残暑の候である。2007年度ならびに2008年度は1番札所霊山寺から12番札所焼山寺まで、2009年度は19番札所立江寺から23番札所薬王寺までの道のりをそれぞれ歩いた。いずれも、2泊3日の行程であった。出発時に、俳句創作入門（事前授業時に示したものを再掲）、秋の季語集、メモ用紙から成る「俳句のしおり」を配付、俳句の募集についての説明を行った。2007年度については、大学院授業「四国遍路と地域文化」においてこの取り組みを行い、46名（男性32名、女性14名）が参加した。大学院授業では事前授業はなく、オリエンテーション時に俳句創作についての趣旨説明と資料配付を行った。2008年度は、「阿波学」の受講生に、大学院生（長期履修生）が含まれていた。参加者数は、学部生が92名（男性37名、女性55名）、大学院生が13名（男性16名、女性7名）であった。2009年度は、学部授業「阿波学」と大学院授業「四国遍路と地域文化」の受講生が合同で歩き遍路を行った。参加者数は、学部生が66名（男性32名、女性34名）、大学院生が13名（男性8名、女性5名）であった。

夜のミーティングでは、各年度とも、創作についての助言を行った。2009年度は、2日目の夜に、1日目の提出句についての鑑賞会を実施した。鑑賞会では、6つの班に分かれ、1日目の提出句を部分的に鑑賞し、班での話し合いを経て特選句と鑑賞文を発表した。提出句は、2007年度と2008年度は後日3句、2009年度は当日1句ずつ計2句とした。実際には、提出句以外の自作の句を取り入れてレポートを構成している受講生も多く、この取り組みにより、現在までに、242名の作者により合計713句の俳句が収集されている。

体験の総括と研究報告のための授業

後期開講科目「地域社会研究」は、歩き遍路体験で得られたことを総括し研究報告を行うという趣旨の授業であった。授業は、いくつかの分野に分かれて行われた。授業1回目にオリエンテーションが行われ、2回目までにいくつかの分野が構成された。3回目からは、分野別に授業が行われた。ここでは、筆者の担当した「俳句心理分野」の授業内容を詳述する。2008年度、2009年度ともに、以下の手順で行われた。

- ①歩き遍路体験学生の俳句をデータベース化する。
- ②上記の俳句を作者名を伏せて鑑賞し、選句・選評を行う。感想や疑問を述べ合う。俳句を受講生（俳句心理班の選択者は、2008年度は4名、2009年度は20名）全員で音読・鑑賞し、選評を述べあうことで、共通理解を深め

ることを目指した。最後に、選評（鑑賞文）の提出を求めた。さらに、入選句の中から一句ずつ特選句を選び、鑑賞文と共に、後日、提出することを求めた。

③自分の俳句1句については、創作意図や創作過程を内省・説明する文章を作成する。

④俳句をテーマ（対象・情景など）別に分類し、作者の心（気持ち、感情、考え、意図）を想像・考察する。

⑤上記の協同的活動についての感想文を書く。ここまでは、教員がイニシアティブをとってすすめるが、本授業では、学習のまとめの段階では、学生側の自主性を重視する。

⑥授業時の取り組みをふまえ、個人ごとに遍路俳句の研究を行い、その成果を発表する。

研究の進め方として、科学的表現による方法（文章、表、グラフなどを駆使して、研究成果を正確に伝える論文を書く）と芸術的表現による方法（俳句と他のメディアとの融合を図る。たとえば、俳句の背景に、その情景や心情の理解を助ける文章・絵画・写真などを付け、一体となった作品を作る）を提示した。

結果および考察

「阿波学」の歩き遍路では、前掲の提出指示句数以外の自作の句を取り入れてレポートを構成している受講生も多く、この取り組みにより、現在までに、242名の作者により合計713句の俳句が収集されている。

「地域社会研究」では、いくつかの俳句が複数の読み手の共感を得て、選句された。2009年度の授業では、上記の方法により、参加者20名により10句ずつ計200句が選句され、同数の鑑賞文が創作された。選句者数別にみた俳句数を Table 1 に示した。

Table 1 選句者数別にみた俳句数

選句者数	該当俳句数	該当俳句数(集約)	比率(%)
8	3	10	6.7
7	0		
6	3		
5	4		
4	1	15	10.0
3	14		
2	27	27	18.0
1	38	38	25.3
0	60	60	40.0
合計	150	150	100

Table 1 に示すように、5名以上が選んだ俳句(高句と呼ぶ)が10句あった。これは全句数の6.7%にあたる。また、2～4名が選んだ俳句は計42句(28.0%)、1名が選んだ俳句38句(25.3%)であった。残りの60句(40.0%)は、誰にも選ばれなかった。2名以上が選んだ共選句の多くは、情景描写が適確で具体性があり作者の心情が適度に表現され、想像の余地を残す俳句であったと考えられる。

特選句に対しては、たとえば、下記のような鑑賞が行われた。いずれも、作者の心情にせまる深い内容である。本稿の著者の評を添えて例示する。鑑賞者の氏名(敬称略)をカッコ内に示す。

【多くの人に選ばれた俳句の鑑賞文の例】

例1. 「自分だけの力ではなく、空海と自然の力を借りて歩いているのだという尊敬と感謝の気持ちを感じた。」
 (浅井歩) 【著者の評】 歴史上の人物や自然に対する尊敬と感謝の気持ちへの共感を素直に表現した鑑賞文である。この選者は、宿泊した民宿のスタッフへの尊敬と感謝気持ちを描く俳句を創作しており、他者とのふれあい・共感という点において、作者の気持ちと選者の気持ちが響き合っているようすがみとれる。

例2. 「雨が止んだのにも気付かないほど歩くことに集中あるいは追いつめられていたことが間接的に読み取れる。そのすがすがしさを、歩くことをあまり苦と感じなくなってきたときの自分の心境と重ねている。」(安井夕

理)【著者の評】俳句が直接描く情景から作者の表現意図を読み取り、それ以前の状況を想像する感性が感じられる。その背景にあるのは、人への思いやりであろう。この選者は、祖母への思いやりにあふれた俳句を創作していた。思いやりのある人だからこそ、自分の心境と重ね合わせて俳句を鑑賞することができるのであろう。

例3。「歩くたびに杖の減り具合が大きくなって、自分がこんなに歩いたんだと実感できたし、それとともに杖にも愛着がわいてきていたことを思い出した。『共に歩んだ』という言葉で、自分の杖に愛着がわいていたんだとわかった。」(米田彩乃)【著者の評】この選者が創作した俳句からは、歩き遍路の途上でかなり苦しい体験をしたことが想像された。だからこそ杖に対する感謝の念と愛着を描いた句に共感を覚えたのであろう。

例4。「地面には数多の草花が咲いています。そして、どんな小さい草花も力強く生きています。そんなことを改めて思わせる俳句です。ふまれてもなお美しくという所が、とてもしみじみとしてすばらしいです。」(中井雄輝)【著者の評】この選者は、先人の営みとその心に思いをはせながら遍路道を歩いたという趣旨の俳句を創作していた。このように、先人の営みとその心を感じることでできる人だからこそ、草の花に目を向ける心を共有することができるのであろう。

このように、特選句に対する鑑賞文から、作者の気持ちと選者の気持ちが響き合っているようすがみとれる。また、特選句以外に対する鑑賞文にも、そのような傾向の鑑賞文が数多く見られた。

上述のように、共鳴者の多い俳句の内容分析の結果、それらの俳句が適確かつ具体的な情景描写を行っており作者の心情が適度に表現され想像の余地を残していることを実証することができた。また、鑑賞文と選者の俳句の内容分析により、作者の心と選者の心が響き合っていることを実証することができた。さらに、特記すべきことに、学部1年生が同じ年代の仲間だけではなく、大学院生の俳句を選ぶケースも見られたことがあげられる。このように、俳句は、年齢やキャリアの違いを越えて人と人とが相互作用し合い、お互いの考えや感情を確かめ合うことのできる、生きた教材としての特徴を兼ね備えているのである。

俳句心理班の受講生は、研究成果をまとめる方法として授業開始時に提示した二つの方法(科学的表現、芸術的表現)のいずれかを用いて研究を行い、その成果を発表した。科学的表現では、自己の特選句あるいは多くの者に選ばれた俳句を読み深めて作者の心情を分析する、授業でおこなったよりも詳細な分類を試みる、俳句に用いられた季語の種類とその数を調べる、など多彩な研究が文章、表、グラフといった整理・表現方法を駆使して行われ、小論文としてまとめられた。このように、他者の俳句に対する共感の表現方法として、絵画や詩文とのコラボレーションという形態もとられた。鑑賞文という表現形式と合わせて、作者の心と選者の心が響き合いを実証するものである。俳句と他のメディアとの融合を図る芸術的表現では、俳句の背景に絵を付けるものが大半をしめたが、写真と組み合わせるものもあり、さらに詩文を組み合わせるものも見られた。

俳句のテーマ別分類と作者の心情の分析

学生と教員との話し合いにより、下記の2つの観点によって俳句を分類し、俳句に詠み込まれた作者の心情を分析した。まず、詠み込まれた対象別に分類した上で、人間に分類されたものに関しては、Emotional Intelligence(情動知能:情動を知覚し、思考を助けるために利用し制御する心的能力・特性)の概念に沿って、分類した。分類の観点を下記に示す。

詠み込まれた対象

- 自然(時候・天気, 天文・地理, 動物・植物など)
- 人間(自己, 仲間や地域の人々など)
- 文化(生活・行事, 寺院, 史跡など)

作者の心(気持ち, 感情, 考え, 意図) —Emotional Intelligence の概念に沿って—

- 自己対応(洞察・実行・制御)
- 対人対応(共感・協力・感謝)
- 状況対応(洞察・対処・危機管理)

以下に、各主題別の作者による内省・説明文を選考して例示する(作者の氏名(敬称略)をカッコ内に示す)。俳句の作者が書いた内省・説明文もまた、作品の一つであるといえる。いずれも、感性に裏打ちされた知性の感じられる作品である。各内省・説明文のあとに示すのは、当該俳句に対する著者の鑑賞文である。

【自然との交流・探究心を詠んだ俳句の内省・説明文の例】

例1。「巖しい山道を歩いていたとき、ふと周りを見ると壮大な竹林が広がっていた。そして、上を見ると、竹の間から光が差し込んで、秋の爽やかな空が見えた。その情景が遍路道で一番印象深かった。」(荒木萌美)【著者の鑑賞文】竹林に覆われた峠越えの道。二日目であれどもたまり、うつむき加減で歩いたとき、ふと上を見ると

竹林のすきまに秋の青空が広がっていた。さぞ、目にしみたことであろう。大自然への畏敬の念が伝わってくる。歩き続けることにも、勇気づけられたのではないだろうか。著者自身がそうであった。その気持ちを前面に出さず、客観的に描写したところにも好感が持てた。

例2. 「歩いているなかで、ふと振り返ると道端にたくさんの彼岸花があった。まるで応援してくれているような気がして頑張れた。」(西坂彩)【著者の鑑賞文】「赤く染め行く」とだけ表現しているが、彼岸花が「応援してくれている」と作者の気持ちが伝わってくる。客観的表現が伝える余情が俳句の魅力醸成するのだ。

例3. 遍路は想像していた以上に過酷で、身体的にも精神的にも追い込まれたのだが、そんな時こそ道端の花や雲の流れなど、普段何げなく見ているものに目が行き、心が救われた。辛いと思いながら歩く道の端に、ひっそりとしかし鮮やかに咲く彼岸花は私にあたたかい微笑みをくれたように感じたのである。」(大鹿小百合)【著者の鑑賞文】「ほほえみのこす」という表現には、彼岸花に対する作者の主観が少し感じられる。しかし、自分の気持ちをあまり前面に出していないという点では先の句と同じであり、余情が感じられる。

【文化や歴史への感興を詠んだ俳句の内省・説明文の例】

「この句は、遍路の間、雨が降っていたので、その雨を涙にたとえてみました。また、遍路のときに空海を感じていたので、雨はまさに空海の涙だなあとと思って詠みました。」(中井雄揮)【著者の鑑賞文】「涙雨」という言葉がある。この言葉に象徴されるように、雨を涙にたとえるのはよくあることだが、それを空海と結びつけるとは、すばらしい感性だと思う。俳句の表現として、倒置法を用いていることにも惹かれた。作者が空海を意識しながら歩いているようすも伝わってきて、その意識の高さにも感心した。

【自己と向き合う気持ちを詠んだ俳句の内省・説明文の例】

「とても辛く普通なら足取りが重くなるはずの道が、友だちと話したり季節を感じるような風景が、気持ちを弾ませてくれて足取りが軽くなる様子をよみました。」(安藤恵里)【著者の鑑賞文】この内省・説明文に対応した俳句では、「普通なら足取りが重くなるはずの道」というところまでは表現できていなかったのだが、内省・説明文に書かれていることの気持ちはよくわかる。歩き遍路の途上で「自己と向き合う」という観点から、このような気持ちを表現する俳句に挑戦することも重要だと感じた。その気持ちを大切にしたいと思う。

【他者とのふれあい・共感の気持ちを詠んだ俳句の内省・説明文の例】

例1. 「歩き遍路一日目終了後、お遍路さんとお遍路さんを支える四国の人々についての講義を受け、その中で『お接待』について学びました。この歩き遍路を通して、さまざまな形のお接待があるのだということを知り、地域の人々の温かさを感じました。私たちが宿泊した宿の方も、私たちが宿に戻ると笑顔で出迎えてくれて、温かくおいしいご飯を用意してくださったので、これもまたお接待の一つではないかと思い、この句を創りました。」(浅井歩)【著者の鑑賞文】一日目の夜にあった講義を受けて創作された俳句に対する内省・説明文である。「さまざまな形のお接待がある」、「これもまたお接待の一つではないか」という内省・説明文の記述から、この作者は、講義から知識を得るだけでなく、それを自ら咀嚼し、自らの体験と結びつけて考えていることがわかる。このような俳句と内省・説明文に出会えたことは、企画・実践者として至上の喜びである。

例2. 「お遍路を歩いていると、だんだん疲れてきてみんなの口数も減り、苦しい時間が増えていきました。しかし、「あとちょっとやけん頑張ろうな。」という友達への何気ない一言が、私に力をくれました。同じ苦しみを分かち合っている仲間だからこそ、この言葉に励まされました。それがとても印象深かったのでこの句を読みました。この句は自分の素直な気持ちです。」(十川彩香)【著者の鑑賞文】歩き疲れて口数が少なくなるほど苦しいとき、ふと聞こえてきた友だちの声に励まされた。ほんとうに素直な気持ちであると思う。その気持ちを表現する際、「友だちに励まされた」とは直接言わずに「みんなの声が力に変わる」と客観的に表現しているところがこの俳句の魅力であると感じた。

【場面や状況への対応の俳句の内省・説明文の例】

「一日目は雨が降ったり止んだりの天気で、足場がとても滑りやすく感じた。特に、鶴林寺を下る時の足場はとてもひどく、ぬれた落葉で何度も足が滑りそうになった。その時の様子を思い浮かべて詠んだ俳句である。」(福良祐香子)【著者の鑑賞文】遍路の途上では、歩き方に気をつけなければならない。このことはオリエンテーション時にも注意されたが、学生たちはどのように受けとめていたのか。この内省・説明文に対応した俳句は、雨の日は滑りやすく、落葉の上は特に滑りやすく、工夫が必要であることを詠んだものだが、この作者は、ほかにさまざまな点で配慮が必要であることに気付いているのではないだろうか。たとえば、細い山道などではお互いに譲り合う、車道を歩くこともあるので気を付ける、車が近づいていることを知らせ合う、話の内容と声の大きさは時と場所を選ぶ、などである。歩き遍路は、さまざまな角度から、場面や状況への対応が必要であること

に気付く体験でもあるのだ。

【Emotional Intelligence の概念に基づく俳句の分類のまとめ】

本節の冒頭では、人間に分類された俳句を Emotional Intelligence の概念に沿って分類したと述べたが、歩き遍路をする人にとって、「自然」はさまざまな状況をもたらし、それぞれへの対応が求められる。また、俳句では、自然界に存在する生物を擬人化して詠み込むことも多く、対人対応における共感・協力・感謝の対象にもなりうると考えられる。このことは、「文化や歴史」にも当てはまる。今後は、このような複眼的な分析・考察が必要であろう。上記の分析の結果、歩き遍路を体験し、その感動を俳句によって表現することで内省力、共感・協力・感謝といった態度、さらには場面や状況に合わせて行動する力も高まるようすがうかがわれ、歩き遍路という体験を俳句という表現形式によって印象づけるという取り組みによって、Emotional Intelligence が向上する可能性が示唆された。

学生による研究成果の発表

俳句心理班の受講生は、研究成果をまとめる方法として授業開始時に提示した二つの方法（科学的表現、芸術的表現）のいずれかを用いて個人あるいは小集団による研究を行い、その成果を発表した。科学的表現では、自己の特選句あるいは多くの者に選ばれた俳句を読み深めて作者の心情を分析する、授業中に分類できなかった、あるいは大まかに分類された俳句についてさらに詳細な分類を試みる、俳句に用いられた季語の種類とその数を調べる、など多彩な研究が文章、表、グラフといった整理・表現方法を駆使して行われ、小論文としてまとめられた。俳句と他のメディアとの融合を図る芸術的表現では、俳句の背景に絵を付けるものが大半をしめたが、写真と組み合わせるものもあり、さらに詩文を組み合わせるものも見られた。芸術的表現による研究成果の一部が1章に例示されている。いずれも、俳句の情景や心情の理解を助け、本授業での学びを深める内容であった。

まとめと今後の研究展望

歩き遍路を体験した学生は、感動を俳句で表現した。体験者の一部は、俳句に詠まれた心情への感慨や共感を選句や鑑賞文、および自己の俳句についての内省・説明文によって表現した。本研究では、歩き遍路を体験した学生による創作俳句を、Emotional Intelligence（鳥井・大竹，2001；皆川・片瀬・大竹・鳥井，2010）の概念に沿って分類・分析することを試みた。その結果、歩き遍路を体験し、その感動を俳句によって表現することで内省力、共感・協力・感謝といった態度、さらには場面や状況に合わせて行動する力も高まるようすがうかがわれ、歩き遍路という体験を俳句という表現形式によって印象づけるという取り組みによって、Emotional Intelligence が向上する可能性が示唆された。上記に加えて、絵画や詩文あるいは鑑賞文とのコラボレーションによる芸術作品や、数量的分析や図表を駆使した科学論文によって表現したことにより、Emotional Intelligence のいっそうの向上がみられることが予測される。その検証については、稿を改めて報告することとする。本稿は2007年度から2009年度までの取り組みをまとめたものであるが、この取り組みは2010年度も実施され、多くの学生が参加し、参加態度も意欲的であった。遍路体験とその感動の表現から成る協同的な学びは、人間形成の基盤となるであろう。

あとがき

著者自身、学生たちと共に遍路道を歩き、途上で見たこと感じたことを俳句にしてきた。そして、俳句を作ることで、この貴重な経験を心に刻み込むことができ、遍路文化の意味を深く考えることができていることを実感している。この3年間の作品の一端を紹介し、稿を閉じることにする。

宿坊に即席句会灯の親し
コスモスや峠を越えて寺参り
秋遍路雨に濡れても遅れても

引用文献

俳人協会（2001）. 学校教育と俳句（社）俳人協会

皆川直凡（2005）. 俳句と教育 『俳句理解の心理学』第5章 北大路書房

皆川直凡・正岡繁豊（2008）. 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価—話し合いを円滑に進める要因の

分析一 日本教育心理学会第50回総会発表論文集，185.

皆川直凡・片瀬力丸・大竹恵子・島井哲志（2010）. 児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討
鳴門教育大学研究紀要，25，31-37.

島井哲志・大竹恵子（2001）. 情動知能：その概念，評価方法と応用の可能性 神戸女学院大学論集，48，159-173.

謝辞

学生の皆さんが課題に真剣に取り組み，余情にあふれる俳句とその内省・説明文，そして鑑賞文を創作してくれたことにより，論文を書くことができました。引用させていただいた文章にはそれぞれ氏名を付記させていただき，感謝の意を表します。また，紙面の関係から本論文では文章をとりあげることができなかった学生の皆さんにも，感謝いたします。

付記

本論文は，2007-2009年度の文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「遍路文化を活かした地域人間力の育成」による成果の一部である。

**Aruki-henro experience, viewing from the psychological point, leading a human development :
examined by analyzing the qualitative contents of university students's reflective-explanatory
sentences words of appreciation on their creating Haiku poem**

MINAGAWA Naohiro

University student who experienced Aruki-henro express their own impression by writing Haikus. Some of them expressed their impression and empathy with selecting Haikus and writing words of appreciation on their selected haikus, and writing reflective-explanatory sentence. This study examined quality of their impression with analyzing the contents of students's reflective-explanatory sentence and words of appreciation on their creating Haiku poem. This study proved that collaborative learning, consisting Aruki-henro experience and expression of the impression acquired by that experience, will form the foundation of human development.